

プロ野球界における学歴の意味についての予備的考察

—「球歴」の教育社会学—

山内 乾史

[抄 録]

学歴の意味を探ろうとするときに、音楽界、美術界、芸能界、スポーツ界などは実力の世界であり、学歴との関係は薄いというのが教育社会学においては常識とされてきた。なるほど、これらの世界で求められる能力には、学校教育の中で身につけられるとは考えにくいものが多く含まれることは事実である。しかし、学歴を旧来の機能主義的解釈で理解するならば、知識・技術・スキルを身につけることが中心概念となるが、学歴の持つ意味をより広く、ネットワーク形成機能、あるいは社会関係資本形成機能をも持ち合わせるものと考えれば、スポーツ界なども無縁ではないと考える。本稿ではプロ野球界を例にとり、「球歴」の意味を広義に解釈し、「学歴は無関係」どころか、極めて重要な役割を果たしてきたことを明らかにするための仮説の提示を行う。いわばプロ野球というスポーツ文化の担い手の形成に学歴が持つ意味について予備的考察を行うというわけである。

キーワード：職業野球、プロ野球、東京六大学、球歴

はじめに

2011年に制定されたスポーツ基本法では「スポーツは、世界共通の人類の文化である」と謳われている。また文部科学省のホームページにおいて、競技スポーツについて下記のように記されている。

スポーツは文化である (https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/070817/001.htm, 2023年9月19日閲覧)。

1. 競技スポーツは人類の創造的な文化活動の一つである

競技スポーツ振興の意義

スポーツは、人間の体を動かすという本源的な欲求に応えるとともに、爽快感、達成感、他

者との連帯感等の精神的充足や、楽しさ、喜びを与えるなど、人類の創造的な文化活動の一つです。

心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、健康の保持増進、体力の向上に資するとともに、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や、とりわけ青少年にとっては、スポーツが人間形成に多大な影響を与えるなど、心身の両面にわたる健全な発達に不可欠なものとなっています。

一方、スポーツには、人間の可能性の極限を追求するという側面があり、このような競技スポーツは、自らの能力と技術の限界に挑む活動であると同時に、その優れた成果は、国民に夢と感動を与えるなど、人々のスポーツへの関心を高め、スポーツの振興に資するとともに、活力ある健全な社会の形成にも貢献するものといえます。

また、グローバル化している現代社会において、スポーツの振興は、世界共通の文化として、我が国はもとより世界のスポーツの発展に寄与するとともに、スポーツを通じた交流により、世界の人々との相互の理解や認識を一層深めるなど、国際的な友好と親善のためにも有意義なものです。

まさにその通りであり、競技スポーツは「人類の創造的な文化」である。わが国の場合には、ことに野球は明治初期にもたらされ、高校野球、大学野球、社会人野球、プロ野球が盛んにおこなわれ国民の耳目を集める国民的スポーツとなっている。

ただし、日本の場合、アメリカ合衆国とは異なり高校野球、大学野球は地域主体ではなく、学校主体で行われるため「教育の一環」として位置づけられてきた。例えば、「学生野球界の憲法」ともいわれる「日本学生野球憲章」においては、次のように述べられている。

国民が等しく教育を受ける権利をもつことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球は経済的な対価を求めず、心と身体を鍛える場である。

もちろん、地域主体で行われる少年野球の活動においても、学齢期の子どもを対象とするわけであるから「教育の一環」という性質は強調されている。ただ、学校の教育活動においてなされるということになると、「教育の一環」という性格はよりいっそう強調されることになる。

他方、プロ野球に関しては、無報酬で（社会人野球の場合は異なるが）純粋性が強調されるアマチュア野球に対して、後述のように、長きにわたり一段低くみられ、蔑まれる傾向があった。

しかし、現在ではプロ野球も含めて、スポーツとしての野球は国民的人気を博している。国家的承認も得ており、読売ジャイアンツのカリスマ的スターだった三塁手の長嶋茂雄は2005年

に文化功労者、2013年に国民栄誉賞、2021年には球界初の文化勲章を受章している。また、同じく読売ジャイアンツの草創期以来の中軸打者で日本初の2000本安打達成者であり、かつ監督として日本シリーズ九連覇の偉業を成し遂げた川上哲治は1992年に文化功労者を受章している。さらに、長嶋茂雄とほぼ同時代のスーパースターで、本塁打数の日本記録を持つ王貞治は1977年に国民栄誉賞、2010年に文化功労者を受章している。ちなみに、文化勲章を受章したプロ野球選手は長嶋のみ、文化功労者を受章したのは川上、長嶋、王の三名のみである。国民栄誉賞については長嶋、王のほかに1987年に広島東洋カープの中心打者で連続試合出場記録保持者の衣笠祥雄、2013年に読売ジャイアンツとメジャーリーグで中軸打者として活躍した松井秀喜が受賞している。さらにこの川上、長嶋、王の三名が現役時代に着けていた背番号は、読売ジャイアンツにおいて永久欠番となっている。川上が監督で長嶋、王が主力選手だった時代1960年代から1970年代半ばにかけての、いわゆる「V9（「日本シリーズ九連覇」時代）」に、プロ野球は競技スポーツ文化として国家的承認を得たということになるのであろう。

ただ、その一方で、過去にプロ野球がアマチュア野球と比べて数段低くみられていた風潮は忘れ去られようとしている。

本稿の目的は次のとおりである。すなわち、①スポーツ文化としてのプロ野球が、誕生から社会的承認を取り付ける過程で、東京六大学野球の人脈に深く依存したことを確認すること、そして②「プロ野球界は実力の世界であり、学歴、すなわち球歴は無関係である」とは単純に断定できないことを示すこと、さらにはプロ野球界における学歴の意味に関して、仮説を示すことである。本稿では紙幅の関係上、あくまでも予備的考察を行い、仮説を提示するレベルにとどまる。仮説の検証はまた別の機会に行う。

1. プロ野球選手の業績と球歴の関係—矢野眞和の研究をめぐって—

プロ野球と学歴の関係については、教育社会学の領域では矢野眞和（1991）の研究で詳しく述べられている。矢野は1965年の第1回ドラフト会議から1985年の第21回ドラフト会議までにプロ野球界に入った1743名すべてを対象として、以下のような分析を行った。

矢野の問題意識は、人間の能力を判断することがいかに難しいことであるのかを深く考察するということにあり、当時盛んであった「学歴主義か実力主義か」という論争に一石を投げようという意図があったのである。プロ球界はアマチュア球界とほぼ同様のルールで行われ、しかも、チームレベルだけではなく、個人レベルで打率とか防御率とか個人の能力を数値化して示すことが可能である。そのため、アマチュア時代の実績をもとにプロに入ってからの実績を予測することが、個人の入職前に身につける能力と入職後に求められる能力の関係性が明瞭ではないとか、入植前の実績を数値化できない領域よりもはるかに容易なはずではないかという仮説が背景にある。しかし、実際にはこれだけ条件が整っていても、予測するのは難しいと

いう結論になるわけである。これは現場でも実感を持たれているところであり、渡辺元智監督とともに横浜高校を強豪校に育て上げた小倉清一郎・同校野球部長（2015）によれば、

プロだと8人獲っても使える選手が1、2人と確率は低いが、高校野球は10人獲ってきたら7人は使える。

とのことで、アマチュア時代の実績が優れていても、プロで成功する確率は低いという見解がみられる。まずは矢野の見解に耳を傾けよう。

表1 到達者数と到達確率

	全体		打者		投手	
	実数	%	実数	%	実数	%
第1段階	1743	100.0	884	100.0	819	100.0
第2段階	1099	63.1	570	64.5	485	59.8
第3段階	280	16.1	123	13.9	150	18.3
第4段階	87	5.0	64	7.2	20	2.4

出典：矢野（1991）をもとに筆者加筆。

表1はプロ野球選手としての成長段階を打者、投手それぞれ4段階に分け、どれぐらの確率で選手が到達するのか、その確率を示したものである。第1段階とはプロ野球の世界に入る段階で、当然100%となる。第2段階とは、代打・代走であれ、守備固めであれ、敗戦処理であれ、とにかくにも一軍の試合に出場した経験を持つ段階である。この段階ですでに三分の一以上

の選手が到達できていないことがわかる。第3段階とはレギュラー・ポジション（投手であればローテーション入り）を獲得する段階で、具体的には規定打席数（試合数×3.1打席）、規定投球回数（試合数）をクリアしたシーズンがあるかどうかが基準になる。この段階になると、打者は7人に1人、投手は6人に1人となる。先の小倉の経験則はこの段階にまさに当てはまるのである。第4段階はリーグを代表する選手になる段階で、具体的にはベストナイン賞を受賞した経験があるかどうかが基準になる。この表を見ると、プロ野球の世界がいかに厳しい社会であるがよく理解できる。

つづいて表2である。ドラフトの順位は期待の度合いを示すと考えられるだろう。ちなみに「ドラフト外」とは、ドラフト会議において指名されなかった選手がテスト等を経て入団する

表2 ドラフト順位と到達確率（単位：人、カッコ内は%）

	1位		2位		3位		4位		5位		6位		7位		4~7位合計		ドラフト外	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
第1段階	223	100	214	100	184	100	169	100	136	100	117	100	144	100	566	100	516	100
第2段階	201	90	184	86	146	79	111	66	87	64	70	56	79	55	347	61	178	34
第3段階	91	41	58	29	35	19	21	12	15	11	11	9	19	13	66	12	23	5
第4段階	32	14	21	10	12	7	5	3	4	3	3	3	5	4	17	3	2	1

出典：矢野（1991）をもとに筆者加筆。

「テスト生（現在で言えば育成選手）」などであり、一般的には入団前の時点の評価が低い選手を指す。

表2からわかることは矢野自身によれば次のとおりである。

(1) 「四位以下についてそれほど差がない」ことがわかる。これについては4～7位の各順位の欄と「4～7位合計」の欄を比較参照されたい。つまり、「特別に目だつ有能な選手以外は、入団前にその実力を判断するのはかなり難しいのではないか（太字は山内による。以下同様）」ということになる。

(2) 第3段階に到達したものは総計273名である。「1位指名は91名でその3分の1を占めるにすぎない…2位と3位をあわせて、93名…残りの3分の1が4位以下という構成になっている。…（中略）…2位以下の活躍が目立つというべきだろう。」

(3) 「ドラフト外の活躍者もかなりいるということである。確率はかなり低い。しかし、ドラフト外の入団者が516名で、他と比較して採用数が非常に多いからである。…（中略）…ドラフトの外の一軍出場経験者178名というのはかなり多い数字と言える。数からすれば、2位指名者に匹敵し、3位以下よりも多い。ドラフト外のレギュラー経験者も23名。これは、3位につぐ数である」ということである。

例えば、この表の示す1965年から1985年の時期であればドラフト外入団で活躍した選手としては（社会人としての球歴は省略）、読売ジャイアンツの新浦壽夫投手（静岡商高）、西鉄ライオンズ（現、埼玉西武ライオンズ）の基満男（報徳学園高→駒澤大）、加藤初（吉良商高→亜大）、加藤博一（多久工高）、東映フライヤーズ（現、北海道日本ハムファイターズ）の江本孟紀（高知商高→法大）などがある。

つまり、矢野の指摘する通り、「ドラフト順位が実力をよく表現しているというよりも、特別優れた人材を別にすれば、その後の活躍を予想するのはむずかしいというのが適切」ということになる。

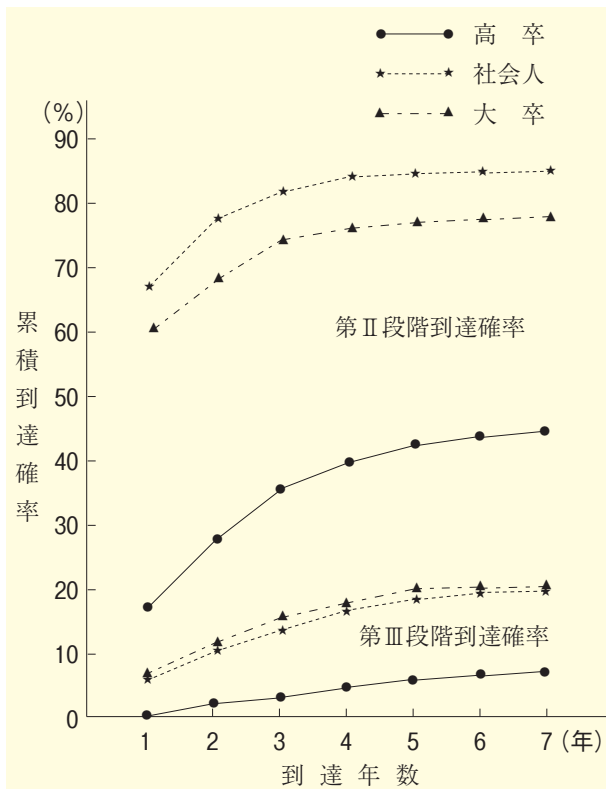


図1 球歴と累積到達確率

出典：矢野（1991）。

次に図1である。矢野は球歴と各段階への到達確率との関係を検討している。第1段階への到達確率は当然ながらすべて100%であり、逆に第4段階への到達確率は僅少なので、ここでは第2段階と第3段階への到達確率を分析対象にしている。

第2段階に関しては、「社会人は即戦力採用で、出場機会を獲得するチャンスは、大卒よりも若干早い。それに対して、高卒はかなり厳しい。7年たっても出場できるのは5割に満たない」ということである。

第3段階の到達確率である「レギュラーの到達確率を見ても、社会人と大卒はほとんど差がないが、高卒はかなり低い。レギュラーになれるのは1割にとどまる。しかし、1位指名の高卒者に限定すれば、大学並みの昇進（？）が可能である。高卒での実力判定は、特別目立った人材でも大卒と同じ程度であり、かなり不確実だといえる」ということである。

すなわち、一見、アマチュア球界の（数量化された）実績をもとに、プロ野球界に入った場合の業績を高い確率で予測することが可能なように見えるのだが、プロ野球界においても、飛び抜けた人材と即戦力以外においては、相当な「読み間違い＝期待外れ」が生じ得るのであって、まして、プロ野球界以外の実社会においては人の能力を予測して採否を決めることはかなり難しいということになる。

このようにみると、球歴なるものは選手の実力と無関係ではないが、さまざまな要因の一つにすぎない、ということになる。しかし、プロ野球界は選手だけで構成されているのではない。監督・コーチやフロントも存在する。そこで次節では監督の球歴を分析してみよう。

2. プロ野球監督の球歴と業績—橋本俊詔の研究をめぐって—

筆者自身が日本のプロ野球界（NPB）において、1936年度（日本職業野球連盟が設立され、初めてのリーグ戦が行われた年度）から2023年度までの87シーズン（1945年度は第二次世界大戦のため不開催）の成績をもとに、名監督、名打者、名投手を選出し、その球歴を調べた。それが表3である。ただし、メジャーリーグでの実績との合算はしていない。また、ここでは社会人野球の球歴は省略している。さらに、中退者も卒業者と同様に扱った。

まず、名監督については通算勝利数が上位32位までの者とした。ちなみに、32位の広岡達朗

表3 NPB名監督、名打者、名投手の球歴（1936年度～2023年度）

	高等教育卒業生・中退者		中等教育卒業生・中退者		外国人	合計
	東京六大学	他大学	旧制中学	新制高校		
名監督	16	6	2	8	0	32
名打者	7	10	1	39	2	59
名投手	6	18	7	28	2	61

出典：筆者作成。

が498勝である。1936年度から1949年度までの一リーグ時代においては、優勝15回のうち12回(80.0%)、1950年度から2023年度までの74シーズンにおいては、セ・パ両リーグのリーグ優勝(ペナントレースで一位)合計148回のうち125回(84.5%)、日本シリーズ74回のうち60回(81.1%)にわたって、この32名の名監督が栄冠を勝ち取っている。

名打者については通算2000安打以上の者55名に加えて、通算2000安打未満ではあるが通算400本塁打以上の者4名を加えた。

名投手については、通算勝利数170勝以上41名に加えて、通算セーブ数150セーブ以上の者18名、通算ホールド数170ホールド以上の者3名とした。江夏豊投手は206勝かつ193セーブで重複するので、総計61名である。

なお外国人選手については日本で教育を受けたヴィクトル・スタルヒン投手を除いて「外国人」に入れている。名監督中には外国人はいない。以上の名監督、名打者、名投手の定義には異論もあろう(例えば盗塁や守備は指標として取り上げていない)が、この定義に従って分析する。

この集計表のもとになったデータを検討すると、名投手で名監督になったものは1名(工藤公康)、名打者で名監督になったものは6名(野村克也、王貞治、川上哲治、長嶋茂雄、山本浩二、落合博満)に過ぎない。まさしく「名選手必ずしも名監督ならず」というわけである。名打者、名投手においては合計120名、外国人を除く116名のうち、高等教育卒業生・中退者は41名と約3分の1であるが、監督については32名中22名が大卒で約3分の2に達する。特に東京六大学出身者が16名と半数を占める。東京六大学出身者は名打者では7名、名投手では6名に過ぎず、名監督と名打者・名投手では球歴がかなり異なることがわかる。

では、なぜ名監督に東京六大学出身者が多くなっているのでしょうか?この問題について検討するために、まず1936年度、つまり日本のプロ野球初年度の各チームの監督と主将の球歴を調べた結果が表4である。

日本職業野球連盟(1936年から1944年まで、つまり一リーグ時代に存在した連盟で、現在の日本野球機構)が創設されたとき、7球団があり、東京巨人軍は現在の読売ジャイアンツ、大阪タイガースは現在の阪神タイガース、名古屋軍は名古屋金鯱軍と合併し、現在の中日ドラゴンズになっている。これら三球団については、親会社も変わっていない。東京セネタースの場合、貴族院議員の有馬頼寧が60%、西武鉄道は40%という関係であり、西武鉄道は親会社というよりも後援者の位置にあった(菊(1993)を参照)。ただ、西武鉄道が日本職業野球連盟創設時にもプロ野球界に関わっていたことは、今日ほとんど知られていないようである。阪急軍は戦後阪急ブレーブスと改称し、現在はオリックス・バファローズとなっている。大東京軍は戦後松竹ロビンスとなり、さらにその後、実質的に大洋ホエールズに吸収合併された。つまり、親会社(資本関係にある企業)が新聞社のものが4球団、鉄道会社のものが3球団存在したわけである。

表4 1936年度のプロ野球各チームの監督と主将の球歴（太字が東京六大学）

チーム名	監督			主将			資本関係
	氏名	出身地	学歴	氏名	出身地	学歴	
東京巨人軍	浅沼誉夫	東京	立教中→早大	津田四郎	兵庫	関西中	読売新聞社
	藤本定義	愛媛	松山商→早大				
大阪タイガース	森茂雄	愛媛	松山商→早大	松木謙治郎	福井	敦賀商→明大	阪神電鉄
	石本秀一	広島	広島商→関西学院高等部				
名古屋軍	池田豊	東京	早稲田中→早大	榊嘉一	京都	同志社高商→明大	新愛知新聞社
東京セネターズ	横沢三郎	台湾	荏原中→明大	大貫賢	東京	荏原中	西武電鉄
阪急軍	三宅大輔	東京	慶大普通部→慶大	宮武三郎	香川	県立工芸学校→高松商→慶大	阪急電鉄
大東京軍	永井武雄	兵庫	第一神港商→慶大	水谷則一	愛知	愛知商→慶大	国民新聞社
	伊藤勝三	秋田	秋田中→慶大				
	小西徳郎	東京	日本中→明大				
名古屋金鯱軍	岡田源三郎	東京	高千穂中→早稲田実業→中大→明大	黒田健吾	岡山	関西中	名古屋新聞社
	二出川延明	兵庫	第一神港商→明大	中村輝夫	愛媛	松山商→明大	
	鳥秀之助	兵庫	第一神港商→法大				

出典：馬立（1961）、菊（1993）を参考にして、筆者作成。

大阪タイガース、大東京軍、名古屋金鯱軍では1936年のシーズン内に監督交代が行われている。この時期、専任コーチはなく、監督が指導者のすべてであった。監督の学歴を見ると、大阪タイガース二代目監督の石本秀一を除き、すべて東京六大学出身者である。この時期の監督には後に審判に転じたものが多く、池田豊、横沢三郎、二出川延明、鳥秀之助は名審判と謳われ、審判としての実績が評価されて野球殿堂入りしている。唯一東京六大学出身者でない石本秀一は戦後、広島カープの初代監督となる人物である。また、主将に関しても8名（名古屋金鯱軍は途中で主将が交代しているため8名になる）中5名が東京六大学の出身者である。

ちなみに、2023年度のプロ野球各チームの監督と主将の学歴を調べた結果が表5（セ・リーグ）、表6（パ・リーグ）である。ただし、キャプテン制を布かないチームもいくつかある。現在では阪神、オリックス、日本ハムがそれに該当する。まず、表5を見ると、セ・リーグでは東京六大学出身者が阪神タイガースの岡田彰布監督のみであることに気づく。主将については、横浜DeNAベイスターズの佐野恵太選手が明大出身であるが、他に東京六大学出身者はいない。

表6をみると、パ・リーグの監督はすべて高卒者になっている。1936年度の状況と対照的である。主将についてはソフトバンクホークスの副将である栗原陵矢をのぞき、全員大卒である

が、東京六大学出身者は千葉ロッテマリーンズの中村奨吾のみである。

日本職業野球連盟創設時と今日とを比べると、監督（あるいは主将も）において、東京六大学

表5 2023年度のセ・リーグ各チームの監督と主将の球歴（太字が東京六大学）

チーム名	監督			主将			
	氏名	出身地	学歴	氏名	出身地	学歴	備考
読売ジャイアンツ	原辰徳	神奈川	東海大相模高→東海大	岡本和真	奈良	智辯学園高	主将
				吉川尚輝	岐阜	中京高→中京学院大	副将
				戸郷翔征	宮崎	聖心ウルスラ学園高	投手主将
阪神タイガース	岡田彰布	大阪	北陽高→早大	なし			
中日ドラゴンズ	立浪和義	大阪	PL学園高	大島洋平	愛知	享栄高→駒大	野手主将
				大野雄大	京都	京都外大西高→佛教大	投手主将
東京ヤクルトスワローズ	高津臣吾	広島	広島工高→亜大	山田哲人	兵庫	履正社高	主将
横浜DeNAベイスターズ	三浦大輔	奈良	高田商高	佐野恵太	岡山	広陵高→明大	主将
				山崎康晃	東京	帝京高→亜細亜大	投手主将
広島東洋カープ	新井貴浩	広島	広島工高→駒大	なし			

出典：筆者作成。

表6 2023年度のパ・リーグ各チームの監督と主将の球歴（太字が東京六大学）

チーム名	監督			主将			
	氏名	出身地	学歴	氏名	出身地	学歴	備考
オリックス・バファローズ	中嶋聡	秋田	鷹巣農林高	なし			
北海道日本ハムファイターズ	新庄剛志	福岡	西日本短期大学附属高	なし			
埼玉西武ライオンズ	松井稼頭央	大阪	PL学園高	源田壮亮	大分	大分商高→愛知学院大	主将
				外崎修汰	青森	弘前実高→富士大	副将
千葉ロッテマリーンズ	吉井理人	和歌山	箕島高	中村奨吾	兵庫	天理高→早大	主将
福岡ソフトバンクホークス	藤本敏史	大阪	天理高	柳田悠岐	広島	広島商高→広島経済大	主将
				栗原陵矢	福井	春江工高	副将
東北楽天ゴールデンイーグルス	石井一久	千葉	東京学館浦安高	則本昂大	滋賀	八幡商高→三重中京大	主将

出典：筆者作成。

学出身者が激減している（ように見える）のはなぜか？本当に激減したのか？もう少し検討してみよう。この点に関してデータをもとに労働経済学者の橋木俊詔が貴重な一連の研究をしている。表7は橋木・齋藤（2012）および橋木（2022）が選手に限定して調べたものである。

この表を見ると、東京六大学出身の選手の数はそれほど、激減しているようには見えない。なお、2023年度シーズンまでに東大出身の選手は累計で6名である。

次に歴代監督の球歴を調べてみよう。

表8によれば2011年度までにプロ野球監督（代行を含む）を経験した208名中98名（47.1%）が東京六大学出身の監督であるということになる。この表は2011年までのものであるから、その後、状況には変化がみられることは予想されるが、それにしてもかなり高い比率である。

表7 プロ野球選手中の出身大学別人数と順位

大学名	1965-2010年度		2011年度		2021年度	
	人数	順位	人数	順位	人数	順位
法政大	78	1	12	8	12	5
早稲田大	62	2	22	1	14	3
明治大	47	4	11	9	22	1
慶応義塾大	20	15	5	20	11	7
立教大	20	15	4名以下	24位以下	8	17
全体	3158					

出典：橋木・齋藤（2012）、橋木（2022）をもとに筆者作成。

表8 プロ野球監督(1936～2011)中の出身大学別人数と順位

大学名	人数	順位
明治大	26	1
早稲田大	25	2
慶応義塾大	21	3
法政大	17	4
立教大	9	5
駒澤大	5	6
中央大	4	7
全体	208	

出典：橋木・齋藤（2012）をもとに筆者作成。

そこで、もう少し詳細に検討してみよう。ここでは1936年度の日本職業野球連盟創設時から加盟している、現在の読売ジャイアンツ、阪神タイガース、中日ドラゴンズに加えて、これら老舗三球団とは異なる発展を遂げた「市民球団」である広島東洋カープを例に2022年度までの歴代監督の球歴等を検討する。

(1) 読売ジャイアンツ

ジャイアンツの場合、1936年のリーグ戦開始時の監督は藤本定義であったが、その前に二代の監督が存在する。初代は三宅大輔で、リーグ戦開始時には阪急軍の監督になっている。三宅は慶応義塾大の出身である。ちなみに橋木・齋藤（2012）では次のように述べられている。

巨人は伝統的に慶應閥と言われ、慶應出身者を好むということである。水原が慶應卒である

し、巨人のオーナーを長いあいだ務めた正力亨（巨人の初代オーナーであった正力松太郎の長男）も慶應卒であることが関係しているのだろう。

たしかに、正力亨は32年にわたりオーナーの地位にあった。表9から見る限り、慶應義塾大出身で監督を務めたのは、歴代14名のうち初代の三宅大輔に加えて、水原茂、藤田元司、高橋由伸の4名である。他方、早稲田大出身の監督は浅沼誉夫、藤本定義、中島治康、三原脩と4名存在する。歴代14名中、11名が大卒、10名が東京六大学の関係者であり、早慶両校だけで8名を占めるというわけである。特に川上哲治が監督になるまで、7代の監督すべてが東京六大学出身というのは特筆されるべきことであろう。川上哲治監督時代においても一軍コーチは、ヘッドコーチの牧野茂、荒川博など、全員が東京六大学出身者を含む大卒であった（表10）。二軍監督と二軍コーチは6名すべて高卒（実績のある元選手）という見事な対照をなしている。

表9 読売巨人軍の歴代監督の出身地と球歴

監督名	出身地	学歴
三宅大輔	東京	慶大普通部→慶大
浅沼誉夫	東京	立教中→早大
藤本定義	愛媛	松山商→早大
中島治康	長野	松本商→早大
藤本英雄	山口	下関商→明大
三原脩	香川	高松中→早大
水原茂	香川	高松商→慶大
川上哲治	熊本	熊本工
長嶋茂雄	千葉	佐倉一高→立大
藤田元司	愛媛	新居浜中→西条高→慶大
王貞治	東京	早実高
原辰徳	神奈川	東海大相模高→東海大
堀内恒夫	山梨	甲府商高
高橋由伸	千葉	桐蔭学園高→慶大

出典：筆者作成。

表10 1970年度の一軍スタッフ

	氏名	出身校
一軍監督	川上哲治	熊本工
一軍コーチ	牧野茂	明大
	荒川博	早大
	白石勝巳	日大
	福田昌久	専大
	鈴木章介	早大
	藤田元司	慶大

出典：ベースボール・マガジン編集部編（2022）をもとに筆者作成。

(2) 阪神タイガース

次に阪神タイガースのケースを見よう。読売ジャイアンツとほぼ同じ歴史を誇るタイガースだが、監督の交代が頻繁であるため、表11にみるとおり、監督経験者は25名とジャイアンツよりもかなり多い。アメリカ合衆国出身かつアメリカ合衆国で教育を受けた田中義雄とドン・ブ

レイザーを除く23名中、東京六大学出身者は早稲田大5名、慶應義塾大1名、明治大3名、法政大2名と合計11名、それを含めて大卒は18名である。他方、後述するように、阪神タイガースの親会社である阪神電鉄は、京都大と神戸大、早稲田大の出身者が多いと言われている。

表11 阪神タイガースの歴代監督の出身地と球歴

監督名	出身地	学歴
森茂雄	愛媛	松山商→早大
石本秀一	広島	広島商→関学高等部
松木謙治郎	福井	敦賀商→明大
若林忠志	アメリカ	マッキンレー高→法大
藤村富美男	広島	呉港中
岸一郎	福井	早稲田中→早大
田中義雄	アメリカ	マッキンレー高→ハワイ大
藤本定義	愛媛	松山商→早大
杉下茂	東京	帝京商→明大
金田正泰	京都	平安中
後藤次男	熊本	熊本工→法大
村山実	兵庫	住友工高→関大
吉田義男	京都	山城高→立命館大
ドン・ブレイザー	アメリカ	
中西太	香川	高松一高
安藤統男	兵庫	土浦一高→慶大
中村勝広	千葉	成東高→早大
藤田平	和歌山	和歌山商高
野村克也	京都	峰山高
星野仙一	岡山	倉敷商高→明大
岡田彰布	大阪	北陽高→早大
真弓明信	熊本	柳川商高
和田豊	千葉	我孫子高→日大
金本知憲	広島	広陵高→東北福祉大
矢野燿大	大阪	桜宮高→東北福祉大

出典：筆者作成。

表12 歴代オーナーの出身地と学歴

オーナー名	出身地	学歴
松方正雄	鹿児島	東大、ペンシルバニア大
小曽根貞松	兵庫	神戸高商
野田誠三	兵庫	八高→京都帝大
野田忠二郎	大阪	大阪高→京都帝大
田中隆造	香川	六高→京都帝大
久万俊二郎	兵庫	高知高→東京帝大
手塚昌利	徳島	四高→京大(新制)
宮崎恒彰	兵庫	神戸大
坂井信也	兵庫	神戸大
藤原崇起	兵庫	大阪府立大
杉山健博	兵庫	東大

出典：筆者作成。

ちなみに、歴代オーナーの学歴は表12のとおりである。阪神タイガースは、親会社の阪神電鉄ともジャイアンツとも異なり、早大出身者が強いと言われてきた。確かに表9を見ると、現在の岡田彰布監督をはじめ、早大の出身者が目立つ。ただ、監督に加えて、選手も含めて考えれば、伝統的に、地元である関西大学の出身者も多い。表13は1959年6月25日19時より行われ

表13 1959年6月25日に後樂園球場で行われた天覧試合の出場選手

打順	大阪タイガース				読売ジャイアンツ			
	守備位置	選手名	出身地	学歴	守備位置	選手名	出身地	学歴
1	遊	吉田義男	京都	立命館大	左	与那嶺要	アメリカ	
2	二	鎌田実	兵庫	洲本高	遊	広岡達朗	広島	早大
3	三	三宅秀史	岡山	南海高	中	藤尾茂	兵庫	鳴尾高
4	一	藤本勝巳	和歌山	南部高	三	長嶋茂雄	千葉	立大
5	左・中	大津淳	兵庫	関大	右	坂崎一彦	大阪	浪華商高
6	右	横山光次	大阪	扇町商高	一	王貞治	東京	早実高
7	中	並木輝男	東京	日大三高	二	土屋正孝	長野	松本深志高
	打	遠井吾郎	山口	柳井高				
	左	西山和良	和歌山	関大				
8	捕	山本哲也	熊本	熊本工高	捕	森昌彦	岐阜	岐阜高
9	投	小山正明	兵庫	高砂高	投	藤田元司	愛媛	慶大
	投	村山実	兵庫	関大				

出典：筆者作成。

た天覧試合の全出場選手であるが、大阪タイガース（1961年4月より阪神タイガースと改称）の出場選手（途中出場も含む）中に3名の関大出身選手が存在することが確認できる。

イエール大学教授で社会人類学者のウィリアム・W・ケリーは、甲子園球場場内外で阪神タイガースを中心とし、それをとりまく「スポーツワールド」のフィールドワークを丹念に行い、その成果を2019年刊行の『虎とバット』にまとめている。その中で大卒の監督が好まれる理由として「フロントが言うには、大卒が好まれるのはそちらのほうが見栄えがするからではなく、フロントや親会社の幹部の覚えがいいからだ」と記述している。また別の箇所では、社内の学閥として「神戸大学と早稲田大学がとりわけ巨大」と述べている。もともと、運輸系の企業は官公庁とのかかわりも深く、旧七帝大や旧三商大の出身者が多くなっており、逆に新聞社では早稲田大をはじめ有力私大の出身者が多くなっている。次項で見ると中日ドラゴンズのオーナーに早稲田大出身者が11名中4名と多いのはそういう企業風土・業界風土と関係があるのだろう（表15）。

なお、阪神タイガースは一リーグ時代を含めると10度にわたりリーグ優勝を果たしているが、そのうち7回は東京六大学出身の監督によりもたらされ、残る3回は旧関西六大学出身の監督によってもたらされたものである。

(3) 中日ドラゴンズ

表14によれば中日ドラゴンズは阪神タイガースよりもさらに監督の交代が頻繁で27名にな

表14 中日ドラゴンズの歴代監督の出身地と球歴

監督名	出身地	学歴
池田豊	東京	早稲田中→早大
榊嘉一	京都	同志社高商→明大
根本行都	東京	早稲田中→竜ヶ崎中→早大
小西徳郎	東京	日本中→明大
本田親喜	アメリカ	平安中→慶大
三宅大輔	東京	慶大普通部→慶大
竹内愛一	京都	京都一商→早大
杉浦清	愛知	中京商→明大
天知俊一	兵庫	甲陽中→明大
坪内道典	愛媛	松山商→天王寺商→立大
野口明	愛知	中京商→明大
杉下茂	東京	帝京商→明大
濃人渉	広島	広陵中
西沢道夫	東京	鹿児島総合中→日大
水原茂	香川	高松商→慶大
与那嶺要	アメリカ	
山内一弘	愛知	起工高
星野仙一	岡山	倉敷商高→明大
高木守道	岐阜	岐阜商高
山田久志	秋田	能代高
落合博満	秋田	秋田工高→東洋大
谷繁元信	広島	江の川高
森繁和	千葉	科学技術工高→駒澤大
与田剛	千葉	木更津総合高→亜大
立浪和義	大阪	PL学園高

出典：筆者作成。

表15 歴代オーナーの出身地と学歴

オーナー名	出身地	学歴
大島一郎	愛知	早大
松根宗一	愛媛	東京高商
杉山虎之助	愛知	開成中
千田憲三	愛知	高松中→早大
小山龍三	長野	松江高→東京帝大
与良五	愛知	名古屋高商
小山武夫	静岡	沼津中→法大
加藤巳一郎	愛知	愛知一中→早大
大島宏彦	愛知	旭丘高→東大
白井文吾	愛知	旧制静岡高
大島宇一郎	愛知	旭丘高→早大

出典：筆者作成。

る。このうちアメリカ合衆国で教育を受けた与那嶺要を除く26名についてみると、早稲田大3名、慶應義塾大3名、明治大7名、法政大1名、立教大1名と東京六大学関係者が15名となる。大卒は19名、旧制中学・新制高校卒は7名である。つまり、ジャイアンツやタイガースとは異なり、明治大の出身者が多くなっているのである。

しかも明治大出身の監督はいずれも中日ドラゴンズ史の中でも重要な監督である。榊嘉一（初代主将）、小西徳郎（のちに名解説者になり、野球殿堂入り）、杉浦清（1931年～1933年の中京商の甲子園夏三連覇の立役者の一人）、天知俊一（明治大監督時代に杉下茂らを育て、

1954年に中日ドラゴンズを初の日本一に導いたことで知られ、野球殿堂入り)、野口明(中京商の甲子園夏三連覇に貢献し、明大を経て職業野球の草創期から活躍した)、杉下茂(戦後の中日ドラゴンズの大エースで、通算215勝をあげ、1954年の日本一の時のMVP、野球殿堂入り)、星野仙一(中日ドラゴンズ一筋に選手として14年間プレーしたのちにドラゴンズの監督を二期にわたって務め、その後阪神タイガース、楽天イーグルスでも監督を務め通算1181勝を挙げ、野球殿堂入り)と7名中4名が野球殿堂入りした。

なお、表15にみるとおり、先述のようにドラゴンズのオーナーは歴代11名中4名が早稲田大(政治経済学部)出身であり、直近の4名のうち3名が旭丘高(旧制愛知一中)出身である。

また、東京大出身の井手峻はドラゴンズ一筋で現役を終えた後、一軍コーチや二軍監督を務めた。新治伸治や小林至、遠藤良平など、東大出身のプロ野球選手は引退後にフロント入りするケースが多くみられるが、コーチになったのは井手が唯一の例である。

(4) 広島東洋カープ

広島東洋カープの場合は、上記の老舗三球団とは異なり、広島県、中国地方出身者の監督が

表16 広島東洋カープの歴代監督の出身地と球歴

監督名	出身地	学歴
石本秀一	広島	広島商→関学高等部
白石勝巳	広島	広陵中→日大
門前眞佐人	広島	広陵中
長谷川良平	愛知	半田商工
根本陸夫	茨城	日大三中→法大
別当薫	兵庫	甲陽中→慶大
森永勝也	山口	柳井商工高→専修大
ジョー・ルーツ	アメリカ	
古葉竹識	熊本	済々饗高→専修大
阿南準郎	大分	佐伯鶴城高
山本浩二	広島	廿日市高→法大
三村敏之	広島	広島商高
達川光男	広島	広島商高→東洋大
マーティ・ブラウン	アメリカ	
野村謙二郎	大分	佐伯鶴城高→駒澤大
緒方孝市	佐賀	鳥栖高
佐々岡真司	島根	浜田商高
新井貴浩	広島	広島工高→駒澤大

出典：筆者作成。

表17 1970年度の一・二軍スタッフ

	氏名	出身校
監督	根本陸夫	法大
コーチ	広岡達朗	早大
	池田英俊	明大
	備前喜夫	尾道西高
	関根潤三	法大
	深見安博	中大
	小森光生	早大
	岡田悦哉	明大
	野崎泰一	専大

出典：ベースボール・マガジン編集部編(2022)をもとに筆者作成。

多くなっている。表16によれば歴代18名の監督のうち、ジョー・ルーツ監督とマーティ・ブラウン監督を除く16名についてみると、広島県出身者が7名、それを含めて中国地方出身者が9名である。東京六大学出身者については法政大が2名、慶應義塾大が1名のみである。大卒はこれを含めて10名である。老舗3球団とは大きく異なる傾向を示している。

また、広島県の強豪校である広陵高（戦前は旧制広陵中）出身者が2名、広島商業高（戦前は旧制広島商業）が3名存在する。ただ1970年度の一・二軍スタッフ（表17）にみるとおり、東京六大学との縁が薄いとも限らない。1968年度～1972年度に監督を務める根本は後に西武ライオンズ、ダイエーホークスの監督を務めるほか、西武ライオンズの球団管理部長、ダイエーホークスの社長など、フロントとして能力を発揮した。

初代監督の石本秀一は既述のように、大阪タイガースの第二代監督を務めるが、母校である広島商業を1924年夏、1929年夏、1930年夏、1931年春と4度優勝に導いた中等野球界の名将として全国に広く知られていた。当時の教え子には南海ホークスで長く監督を務め、NPB歴代最多勝利監督である鶴岡一人がいる。

以上、実力主義の典型とされるプロ野球界においても、日本職業野球連盟の草創期において、東京六大学出身者であることが非常に大きな意味を持ったこと、そして現在でも、草創期ほどではないにせよ、一定の影響力を持ち続けているつまり絶対的優位ではなくなったにせよ、相対的に優位である一のはなぜなのであろうか？この点を最後に考察して仮説を提示したい。

3. 職業野球からプロ野球へ、興行からスポーツへ

山室寛之の書籍（2014）はプロ野球が蔑まれていた時代から国民的スポーツへと成長する過程を丹念に調べ上げ検討した労作であるが、その著書の帯に王貞治が推薦の辞を寄せている。以下のとおりである。

80年の歴史のなか、プロ野球が国民的スポーツになった時代を、これほど忠実に語った本はない。プロアマ問わず、多くの野球を愛する人に読ませたい。

つまり、プロ野球は最初から国民的スポーツであったのではないのだ。まず、プロ野球が国民的スポーツになる前の時代の状況を確認しておこう。文芸春秋社が1977年に刊行した『人物・日本プロ野球（文芸春秋デラックスNo.37、第4巻第5号）』には、一リーグ時代から戦後早々に大活躍したプロ野球界の大スター5名による座談会が収録されている。5名とは藤村富美男、千葉茂、小鶴誠、大下弘、青田昇（司会は岡田実）である。その中に次の一節が出てくる。

藤村 私が入団したころのタイガースは、全部で18名ぐらいでした（山内註：結成時は17名、1936年度シーズン途中で2名が加入し19名になる。監督以外にコーチはいない）。なにしろ、二チーム出来るなあなんて言っていたんですから。

千葉 ジャイアンツは23人ぐらいいた。（山内註：千葉の入団時は24名）

大下 ぼくもそれぐらいでしたよ。

岡田 今の一軍のメンバーより少ないわけですね。

小鶴 あの当時、ぼくなんか田舎にいたもんだから、プロ野球に入るって言うと、何かサーカスにでも売られるような気持ちだったですよ。田舎の人はプロ野球なんて知らなかったからね。

藤村 ファンに会っても、「何や、野球屋か」ってな目で見られとったものね。電車に乗ってもそんな雰囲気を感じましたよ。

ここで小鶴誠が「プロ野球に入るって言うと、何かサーカスにでも売られるような気持ちだったですよ」と発言しているのが象徴的である。ちなみに小鶴は1942年から1958年にかけて足掛け15年にわたって名古屋、松竹、広島等で主軸打者として活躍し続けた戦前期からの大スターである。また、藤村富美男はタイガース創設からの選手で、初代ミスター・タイガースと呼ばれている。広島の呉港中時代に夏の甲子園大会で優勝投手となり、大阪タイガース創設時に入団した。球団創設時から引退までつけた背番号10は永久欠番になり、タイガースでは他に誰も付けたことのないという、日本球界唯一の背番号になっている。

当時、職業野球選手は藤村の言うように「野球屋」、 「男芸者」とか「野球芸人」と蔑まれたという経験談は多くの選手の伝記や自伝にみられる。職業野球だけではなく、プロ・スポーツ全体について、「スポーツ」であるよりも「興行」あるいは「ショー」であるという考え方がみられたわけである。これには、純粋なアマチュア野球、教育の一環であるアマチュア野球と比して、汚い駆け引きを含むという含意がある。実際に1970年代初頭までは八百長事件も数多く告発されている。

さて、大阪タイガース結成時の二刀流の中心選手、景浦将が大阪タイガースに入団する際のいざごぎについて、大阪タイガース初代主将の松木謙治郎（1973）は次のように記している。

ちなみに、「坪内」とは職業野球草創期のスター、坪内道典のことで、松山商から天王寺中に転校し、立大に進学した。そして大東京軍の創設時メンバーとなって、実働15年の名選手となり、ドラゴンズ等の監督も務めて、野球殿堂入りを果たしている。

こうしてタイガースに入団したが、当時学生野球とプロ野球との対立がはげしく、しかも、景浦は立大のスターだけに、合宿を夜逃げのように脱出して大阪についた。彼の脱出の後、同室の坪内（元中日）が、フトンや身の回り品を甲子園に送るのに苦勞したものである。これが

野球部に知れて坪内も立大におれなくなり、昭和十一年（一九三六年）七月に大東京に入団することになった。（松木（1973））

橋木（2016）は、日本では「野球の普及に一役買ったのは、国立の旧制学校、特に第一高等学校（のちの東大教養学部）というエリート校だったことを記憶しておきたい。一高・東大卒業という学歴は日本の学歴社会を象徴するものだったことは言うまでもない」とし、「勉強・学問を重視する一高の野球部がなぜ強かったのか、いろいろな理由が指摘できる」とし、三つの理由を挙げる。その三つの理由とは、「第1に、学校の体育施設では伝統的な柔道や剣道が盛んな時代だったので、他の学校では野球がマイナーなスポーツであり、まわりに強い野球部がなかった」こと、「第2に、エリート校の一高には外人教師が多く、アメリカ人教師が熱心に野球を生徒に教えたことの効果である」こと、「第3に、『東京大学野球部90年史』でも書かれていることであるが、1890（明治23）年における明治学院との試合で『インブリー事件（一高生が明治学院の講師・インブリーに投石した事件）』が起り、一高側が責任をとる事態になった。これを理由に一高野球部はもっと強くならねばと反省し、猛練習に励んだので以前より強くなったこと」である。

筆者はこのうち、特に第2の外国人教師の存在が大きな要因であると考え。早大の前身である東京専門学校、慶大の前身である慶應義塾、明大の前身である明治法律学校、法大の前身である東京法学社（東京法学校）、立大の前身である立教学校はもともと社会科学系の学校として創立され、イギリスやフランス、アメリカ合衆国に範をとり、外国人教師を多く擁していた。また、第一高等学校も文科甲類、理科甲類は英語を第一外国語とする課程であり、英米人教師を多く擁していた。彼らが日本人生徒に野球を教えたため、学力の高い学校から野球が広がっていくことになるのだ。「旧制中学の中で野球が強い学校が、当初は各地で学力の高い名門中学といわれたことを、指摘しておこう。こういう中学校から一高に進学する生徒が多かったのである。中学校の教師として、一高・東大卒がそれらの旧制中学に赴任しただろうし、その中学校で生徒が野球をすることを支援した可能性がある」と橋木は述べる。橋木・齋藤（2012）の指摘によれば「私立大学をメンバーとする大学団体である日本私立大学連盟は、戦前からこれまで早稲田が慶應の学長が会長になることがほとんどであった。ついでながら国立大学協会の会長には東大の学長がつくことが多く、そのことが東京六大学野球リーグから東大を退出させられない事情の一つでもある」ということである。つまり「教育の一環」として行われる学生野球においては、「職業野球」とは異なり、勉強と野球の両立こそが望ましく、学業重視の姿勢を打ち出すためにも、これらの名門大学がリーグを結成し、弱くとも入れ替え制など導入しないというわけである。

いずれにせよ、日本職業野球連盟が創設された時点で、東京六大学が日本で最も実力があり、人気もあるリーグだったのである。しかも、歴史があるため、野球界の重要なネットワー

クはこれらの大学によって作られていた。日本職業野球連盟に加盟した各球団は、選手を集めるために、様々な手を使ってこの人的ネットワークに手を伸ばそうとし、その戦略の一環として監督や中心選手に六大学出身者を据えるのである。

例えば、東京巨人軍の藤本定義と大阪タイガースの森茂雄はいずれも松山商から早大に進んでいるが、藤本のもとには千葉茂、森のもとには景浦将と伊賀上良平という松山商の後輩が、これらの先輩との縁故で入団している。昭和初期の段階において、中等学校野球（現在の高等学校野球）界で最も実績を上げていたのは松山商と広島商である。そのOBでかつ東京六大学出身者であれば監督の人選として申し分なかったのである。

さて、先に述べたようにドラフト制は1965年から（1966年シーズンに初年度を迎える選手から）始まったが、その趣旨は戦力の均等化、契約金高騰の抑制ということであった。

表18にみるとおり、一リーグ時代は3球団しか優勝を経験せず、しかも過半数は読売ジャイアンツの優勝である。特に藤本定義監督時代に7回の優勝を経験している。二リーグに分裂して水原茂監督時代には11年間で8回のリーグ優勝、4度の日本一となっているが、白眉は川上哲治監督時代であり、14年間で11回のリーグ優勝、そしてすべて日本一になっている。ここに日本シリーズ九連覇の偉業も含まれている。読売ジャイアンツは二リーグ制移行後74年間で22

表18 戦前期より存在する5チームの2023年度までの優勝回数

	年度	ジャイアンツ	タイガース	ドラゴンズ	ホークス	ブレーブス/ ブルーウェーブ/ バファローズ
一リーグ時代	1936-1949	9	4	0	2	0
水原監督時代	1950-1960	8(4)	0(0)	1(1)	5(1)	0(0)
川上監督時代	1961-1974	11(11)	2(0)	1(0)	5(1)	5(0)
ポスト川上監督時代	1975-2003	11(5)	2(1)	3(0)	3(2)	7(4)
PO/CS制導入後	2004-2023	6(2)	3(1)	5(1)	7(7)	3(1)
リーグ戦優勝&PO/CSで敗退		CS2	CS0	CS0	PO2, CS1	PO0, CS0
リーグ戦2位以下&PO/CS優勝		CS0	CS1	CS1	PO0, CS2	PO0, CS0
二リーグ制以後合計						
リーグ優勝回数		38	6	9	19	15
日本シリーズ出場回数		36	7	10	20	15
日本シリーズ優勝回数		22	2	2	11	5

注：() 内は日本シリーズ優勝回数。PO=プレイオフ、CS=クライマックス・シリーズの略。セ・リーグは2007年度から、パ・リーグは2004年度から導入（2004年度～2006年度はプレイオフ。2007年度からはクライマックス・シリーズ）。「PO/CS制導入後」については、日本シリーズ出場をリーグ1位とみなした。

出典：筆者作成。

回日本一になっているが、そのうち半分の11回が川上監督時代である。川上監督退任後は49年間で7回に過ぎない。1974年にドラゴンズが20年ぶりにリーグ優勝し、1975年にカープが初優勝、1978年にスワローズが初優勝し、ジャイアンツの絶対的優位は相対的優位に変わったのである。つまり、ドラフト制の導入による戦力の均等化については、課題（完全ウエーバー制ではないなど）はあるものの、ある程度功を奏したということであろう。契約金は1000万円、年棒は180万円と定められ、果てしない契約金高騰にも歯止めがかかった。

ただ、もう一つの効果があった。新人選手獲得をめぐる自由競争の時代には、プロ野球側の強引な獲得がしばしばみられ、甲子園や神宮で活躍した有力選手は大学や高校を中退してしばしば入団している。例えば1961年夏の甲子園大会の優勝投手である尾崎行雄投手（浪商高）はその顕著な例である。もちろん、勉強が不十分で単位をそろえられなかったとか、本人が強い意志をもって主体的な自己選択で中退したとかなどのケースも相当数存在する。しかし、「教育の一環」として行われている学生野球に、プロ野球界が札束を積んで、学業を途中で断念させて入団させるという事態は学生野球界とプロ野球界との関係をかなり険悪にしてきた。そして、そこまで強行に入団したのに、芽が出ずに解雇という例も多かった。

少し変わった例を挙げよう。例えば、藤村富美男に次ぐ第二代ミスター・タイガース、村山実は1955年に住友工高を卒業して関西大学に進学するが、2年上の左腕投手、法元英明が中日ドラゴンズへ、1年上の右腕投手、中西勝己が毎日オリオンズへと、それぞれ入団のため、関大を中退したことにより、2回生でエースとなり、1956年秋の旧関西六大学野球リーグで優勝、さらに全日本大学野球選手権大会でも全試合に先発完投し、東京六大学以外の大学として初の大学日本一になり「村山旋風」をおこした。法元も中西もプロの世界で一定の活躍は見せたが、この二人が関西大学を中退せずに残っていたら、村山の運命も変わっていたであろう。

関西大学では村山の卒業後に「村瀬問題」という大きな問題が生じる。関大のエース、村瀬広基投手が2回生次で中退して読売ジャイアンツに入団する。関大は退学を了承したのだが、旧関西六大学野球連盟が退学も巨人入団も認めず、学生野球側が態度を硬化させる一因となる。結局、その後村瀬投手は1961年の新人のシーズンには目覚ましい成果を上げるが、あとは鳴かず飛ばずのままプロ生活は3年で終わりを迎え、退団する。このような「中退→プロ入団」というケースが、ドラフト制導入後に少なくなった（なくなりはないが）のもその効用の一つであろう。

それと同時に橘木（2022）が指摘するように、1970年代から1980年代にかけて東京六大学とついで旧関西六大学（現関西学生野球連盟）の独占に近い状態から、分散化が進行するのである。つまり、東都大学リーグや首都大学リーグなどで中央大、日本大、駒澤大、亜細亜大、青山学院大など有力大学が東京六大学、旧関西六大学以外から続々と登場し、東京六大学の絶対的優位は相対的優位に変化する。

ちなみに、旧関西六大学は、1925年に結成された東京六大学の盛況に刺激を受けて、1931年

に關関同立4校に加えて京都帝大、神戸商業大(現在の神戸大)の六大学で結成され、1962年までは入れ替え制のないリーグ戦を行っていた。現在の関西学生野球連盟では、神戸大が外れ、かわって近畿大が加盟している。ほかに難関国立大学では、東北大学(仙台六大学)、広島大学(広島六大学)、九州大学(九州六大学)が入れ替え制のないリーグに所属している。

さて、ここで予備的考察として、矢野も橋木も提示していないけれども、提示しておかねばならない仮説は、以下のとおりである。つまり、東京六大学が日本職業野球連盟の草創期から少なくとも30年近く絶対的優位を保ち、さらにその後も相対的な優位を維持しているように見える理由の一つは、もちろん人気・実力の高さもあるだろうが、濃密で強固な人的ネットワークが形成されていることにあるという仮説である。大学体育会系の有力なクラブは寮制度を布いている。誰でも入寮できるわけではなく、一定の基準があるが、寮制度の下、寝食を共にし、部活動に励んだ関係は、その後も長く財産となるであろう。東京六大学所属の各大学は当然寮を有するし、首都大学リーグ、東都大学リーグ、関西学生野球連盟でも寮を有する大学がほとんどである。多くの有力高校でも寮制度を持っている。ただ、歴史のある大学野球部は高齢のOBから現役選手までが一堂に会して総会を定例で盛大に開くなどして離れた期の先輩後輩との親睦を深める機会を持ち、監督になった場合、財界に進出したOB/OG(硬式野球部のOB/OGとは限らない)がスポンサーとして支えるなど、様々な効用をもたらすのではないだろうか。

また東京六大学(あるいは現在の関西学生野球連盟も)のような、入れ替え制のないリーグは卒業後も大学の壁を越えて交友が続くのである。アメリカンフットボールやサッカー、ラグビーなどの団体競技でも同様であるが、大学を卒業した後も、様々な機会に交流を深め、支え合う関係になるのだ。そして東京六大学には東大、関西学生野球連盟には京大が加盟していることの効用は、ここでも発揮されるのではないだろうか。

橋木(2016)も指摘する通り、ドラフト制の導入、そしてプロ野球史上最大の不祥事である「黒い霧事件」、読売ジャイアンツV9などの時期である1965年度~1970年代半ばにかけての時期は、さまざまな意味でプロ野球界にとって大きな転機であった。ドラフト制の導入は戦力の均衡化、年棒の高騰抑制に貢献したことは先述した。「黒い霧事件」とは1969年10月に西鉄ライオンズのN投手の八百長行為=敗退行為が表面化し、さらにN投手の告白とオートレース八百長に絡む警察の捜査によって、プロ野球界全体で6名の永久追放者など、謹慎も含めると阪急、広島以外の10球団から多くの処分者を出した大事件である。当時も今も、この事件への球界上層部の対応には賛否両論があるようだが、プロ野球が職業野球から「真の」プロ野球へ、興行から「真の」スポーツへと進化していくうえで乗り越えねばならない壁であったと考える。

なお、本稿では「球歴」を扱うとしながらも、社会人野球の経歴を扱っていない。高校を出て社会人に進む者、大学を出て社会人に進む者など、既存の学歴の中にどう位置づけるべき

か、先行研究も筆者自身もしっかり検討できていないからである。これについては他日を期したい。

以上仮説の提示をもって本稿を閉じるが、近年、大学体育会系クラブの寮で不祥事が相次ぎ、社会問題化している。しかし、負の部分も含めて寮の効用、教育的効果を見直す必要があるのではないだろうか。

[引用・参考文献]

- 石坂友司（2002）「学歴エリートの誕生とスポーツ—帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から—」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第10巻, pp.60-71
- 宇佐美徹也（1993）『プロ野球記録大鑑 [昭和11年—平成4年]』講談社
- 蕪木和夫（1992）『幻の300勝投手—永久追放は正しかったか—』銀星出版社
- 菊幸一（1993）『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学—日本プロ野球の成立を中心に—』不味堂出版
- ケリー, ウィリアム・W.（高崎拓哉訳）（2019）『虎とバット—阪神タイガースの社会人類学—』ダイヤモンド社
- 恒文社（1983）『新版日本プロ野球 歴代名選手名鑑』恒文社
- 小倉清一郎（2015）『小倉ノート—甲子園の名参謀が明かす「トップチーム」の創り方—』竹書房
- 小林至（2022）『野球の経済学—サクッとわかる ビジネス教養—』新星出版社
- 佐藤文明（2003）『六大学野球—六大学はなぜ六大学なのか…—（For Beginners94 イラスト版オリジナル）』現代書館
- 鈴木武樹・高松圭（1970）『プロ野球エッセイ 黒い霧は晴れたか』新書館
- 橋木俊詔・齋藤隆志（2012）『スポーツの世界は学歴社会』PHP研究所
- 橋木俊詔（2016）『プロ野球の経済学—労働経済学の視点で捉えた選手、球団運営、リーグ運営—』東洋経済新報社
- 橋木俊詔（2022）「スポーツ、文学賞 ②プロ野球」橋木俊詔・小林哲夫『日本の「学歴」—偏差値では見えない大学の姿—』朝日新聞出版, pp.150-160
- 玉木正之・ホイテイング, ロバート（1991）『ベースボールと野球道—日米間の誤解を示す四〇〇の事実—』講談社
- 日本野球機構セントラル野球連盟記録部パシフィック野球連盟記録部BISデータ本部編（2004）『The Official Baseball Encyclopedia 2004 日本プロ野球記録大百科 [第四版]』ベースボール・マガジン社
- 藤村富美男・千葉茂・小鶴誠・大下弘・青田昇・（司会）岡田実（1977）「われら野球のサムライたち」『人物・日本プロ野球（文芸春秋デラックスNo.37, 第4巻第5号）』文芸春秋社, pp.138-145
- ベースボール・マガジン編集部編（2022）『別冊ベースボール夏祭号1970年編（[シリーズ] よみがえる1970年代のプロ野球 Part.7）』ベースボール・マガジン社
- 毎日新聞社編（1980）『日本プロ野球史—沢村栄治から掛布雅之まで—（別冊1億人の昭和史）』毎日新聞社
- 馬立龍雄編（1961）『プロ野球二十五年史』報知新聞社
- 松木謙治郎（1973）『阪神球団史 タイガースの生い立ち』恒文社
- 松木謙治郎（1982）『阪神球団史 タイガースの生い立ち 1982年度版』恒文社
- 松木謙治郎（1986）『大阪タイガース球団史 1985年度版』恒文社
- 松木謙治郎・奥井成一（1992）『大阪タイガース球団史 1992年度版』恒文社

- 南博編 (1982) 『「日本人とプロ野球」研究—人を動かすメカニズム—』 ブレーン出版
- ホワイトティング, ロバート (鈴木武樹訳) (1977) 『菊とバット—プロ野球にみるニッポンスタイル—』 サイマル出版会
- ホワイトティング, ロバート (松井みどり訳) (2005) 『菊とバット **【完全版】**』 早川書房
- 森岡浩 (2003) 『プロ野球人名事典』 日外アソシエーツ
- 矢野真和 (1991) 『試験の時代の終焉—選抜社会から育成社会へ—』 有信堂高文社
- 山際康之 (2018) 『八百長リーグ—戦時下最大の野球賭博事件—』 角川書店
- 山室寛之 (2014) 『巨人V9とその時代』 中央公論新社

(やまのうち けんし 教育学科)

2023年11月6日受理

